

消化器内科

概要

部長：猪熊 哲朗

スタッフ：10名

専攻医：8名

年間入院症例数：病棟 1,866名（うち救急外来からの緊急入院約 620名）

検査件数：	上部消化管内視鏡（年間）	8,473件
	下部消化管内視鏡（年間）	4,607件
	ERCP（年間）	657件
	小腸内視鏡検査	73件
	ESD	214件
	腹部血管造影	118件
	RFA	90件
	腹部超音波検査	9,404件

専門医・指導医：日本消化器病学会指導医・専門医 8名、日本消化器内視鏡学会指導医・専門医 6名、日本肝臓学会指導医・専門医 4名と経験の豊富なベテランが指導にあたります。また、日本内科学会総合内科専門医 5名・内科認定医 4名と臨床研修の指導スタッフも充実しています。

学会活動実績：論文発表 2件、学会発表（国外 0件、国内 48件）令和 3年度

特徴

当院は、神戸市の中核病院であるだけでなく、全国的にも最高水準の臨床病院としての伝統と実績を有しています。消化器内科も、これまで優秀な先輩医師を輩出してきましたが、それは、豊富な臨床例と責任ある指導体制によるものであると考えています。

腹部超音波検査は消化器診療の要であり、当科は超音波検査技師と協力しながら常に最新の機器で診療と研究をおこなってきました。肝細胞癌に対する TAE など IVR についても、放射線科と協力しながら、受持患者を責任もって治療できる体制を維持しています。この、集学的治療の経験が、幅広い見識を持った臨床医を育ててきた原動力と考えます。また、非常に忙しい救急診療は、貴重な学習の場でもあり、短期間でほぼ全領域の消化器急性疾患を経験することが可能となります。時間内には救急当番・時間外には消化器内科当直がおかれ、スタッフと専攻医で 24 時間救急体制を担っています。

当科は京都大学医学部消化器内科の関連施設であり、専攻医終了後は当院スタッフだけでなく、京都大学大学院・京都大学関連施設での勤務も斡旋することが可能です。

平成30年春から、内科専門医研修プログラムがスタートします。当院も基幹施設として各領域の内科専門医の養成を図るプログラムを開示しますので、病院HPを参照ください。

消化器内科の方針としては、1年目のスタートより4ヶ月間はサブスペ（消化器）研修にあてており、この期間に消化器の基礎・内視鏡検査などの基本手技を学んでもらいます。その後、基本領域研修（内科8科を1ヶ月ずつ、8ヶ月間でローテートします）に入りますが、各領域の症例を「内科学会専門医」取得に必要な規定数担当してもらい、内科医としての視野を広げることを目標とする一方で、サブスペ領域の経験が空洞化しないように業務面での配慮をしています。2年目は院外研修期間となりますが、連携施設は神戸市立医療センター西市民病院、西神戸医療センター、兵庫県立尼崎医療センター、日赤和歌山医療センター、天理よろづ相談所病院、大津赤十字病院など京都大学消化器内科関連病院で、サブスペ領域主体の研修をおこないます。3年目は専攻医最終学年として当科にて診療の主力を担ってもらおう予定です。

当科では、基本的に3年コースで研修プログラムを構築しています。消化器領域は、多くの症例を経験し、多くの手技をマスターすることが重要ですので、ハイボリュームセンターの利点を十分活用して、3年計画で一人前の消化器内科医を育てることを目指します。下記に、当科の研修の特色を述べます。

1.実戦（実践）主義

当科の最大の特徴は、実戦（実践）主義にあります。教科書的知識は基礎として非常に大切であることはいうまでもありませんが、実際の臨床現場では、むしろ教科書どおりにはいかないことや教科書のどこにもものっていないことが、頻繁に起こります。目の前で苦しんでいる患者さんを救うために医療は存在するのであり、人間は理論（時にエビデンス）で割り切れるほど単純な存在ではありません。そういった点で、医学は学問でありながら実学ともいえます。我々は、経験を最も大切なものと考えます。実際の患者さんを救うために、悩み学び努力した結果が、医師個人の実力を高めるのはもちろん、消化器内科グループひいては病院全体のレベルを上げると考えます。

2.マンツーマン指導体制

最初からいきなり胃カメラ検査ができる人などいません。もちろん、そんなことをしてもらっては困ります。まず、検査の意義・病態の理解・診断学・機器の取扱方法等を学習した上で、上級医の指導の下で検査の修得を目指します。新人医師が汗だくになって検査をしているうしろで、指導医も手に汗をにぎりながら立ち会います。不安になって振り向いて目があつた瞬間に適切な指導が得られるでしょう。決して、手取り足取りで教えるわけではありません。本人の力量を評価しながら、さらに高度な判断や処置が必要なときに、助言と救いの手がでてきます。

3.豊富で貴重な症例（経験）

神戸市内は言うに及ばず近畿でも有数の症例を数える病院として、軽症から重症まで極めて幅の広い病態を経験することができます。一般的な臨床研修病院と比べても短期間で多くの症例を担当するため、消化器病学会・内視鏡学会・肝臓学会などの専門医は問題なくクリアできるでしょう。普通、一年（時には一生）に一例経験するかどうかといったまれな病態も、普通に出会います。しかし、症例が多いからといって、一例一例をおろそか

にすることは決してありません。患者さんにとっては、初めての病気・初めての不安であり、我々は専門家として、冷静かつ誠意を持って対応することが求められます。

4.複雑な病態を専門家集団で解明する

一見「わけわからん」病態にも、頻繁に遭遇します。その時は、ひとり悩まずにまず上級医に相談してください。貴重なアドバイスがもらえるはずですが、それでも困ったときには、各診療科にコンサルトします。担当医がフル回転することはもちろん必要ですが、いつの間にか専門家の救いの手があちこちから伸びてきます。

5.伝統あるトレーニングシステム（研修プログラム）

当院では、30年以上も前から、独自の臨床研修プログラムで臨床医を育て全国に送り出してきました。平成30年度からスタートする内科専門医研修プログラムにおいても、その経験をもとに内科全体で指導体制を検討しました。ここで、強調したいことは、この体制が一朝一夕でできたものではなく、試行錯誤を繰り返すなかで磨かれてきたものだという事です。それは、現在も続いており、毎月病院幹部から若手スタッフまで集まり、問題点の検討・改善を繰り返しております。我々の実践してきた卒後教育は、換言すれば「厳しいゆりかご」みたいなもので、多くの実臨床での経験を積む中で、誰が教えるでもなく、皆が教えお互いに学び、いつの間にか一人前になるのです。そこには、カリスマ指導医や目新しい奇をてらったプログラムは必ずしも必要ないと考えます。

一般目標

豊富な臨床経験が得られることで、消化器内科医としてはもちろん、臨床医としての基礎を固めることを目標とします。医師である以前に人間としてバランスのとれた、患者や同僚に思いやりのある医師を育てることが大切と考えています。

医療はチームワークであり、ベテランスタッフとペアで診療を経験することで、短期間で種々の治療手技をマスターできるように配慮します。具体的には、上部/下部/胆膵内視鏡をマスターした上で、治療内視鏡として止血術・EMR・ESD・ERCP・ESTを含む胆膵治療手技・食道静脈瘤治療を、IVRとして肝臓癌のTAE・RFAなどの治療をマスターすることを目標とします。

行動目標

- 1年目：** ～4ヶ月目 病院のシステム（電子カルテ/診療体制）を習得する。
US、上部/下部内視鏡、EUS、ERCP、腹部アンギオ、内視鏡治療（止血術/EMR）US下治療（PTCD/RFA）をスタッフの指導で研修する。
主治医として、責任を持って入院患者の診療にあたる。
消化器内科当直/救急当番を上級医の指導の下に経験する。
カンファレンスにて、診断・診療能力を高める。
- 5ヶ月目～
12ヶ月目 内科系診療科8科を1ヶ月単位でローテートし、主治医として診療にあたることで、広く内科全般の知識習得に当たる。この期間で、内科専門医研修で定められた症例数を経験する。
その間も、内視鏡研修/消化器内科当直/救急当番を継続し、消化器内科

医としての実力をつける。

2年目： 院外研修 連携施設での研修を施行する。希望がある場合は、京都大学消化器内科（6ヶ月～12ヶ月）科関連病院でのサブスペ領域主体の研修も可能です。その際、当科での研修が継続/発展するように、診療科間で責任持って調整します。

3年目： 研修期間を通じ、学会発表・論文作成を積極的におこなう。国際学会発表も推奨する。消化器内科 HP「専攻医の広場」を参照ください。

消化器専門分野の手技、知識を一層深める。3年間でESDは30-40例を術者として経験してもらいます。

後輩専攻医を指導できるようにする。いわゆる「屋根瓦方式」です。

週間スケジュール

	午 前	午 後	夕
月	研修医・専攻医 モーニング ミーティング (AM8:00)		内科カンファレンス (PM5:30~)
火			外科合同カンファレンス (PM6:00~)
水			腹部エコーカンファレンス 内視鏡カンファレンス
木			消化器内科カンファレンス
金		病棟回診 (AM11:00)	食道癌カンファレンス

専門研修プログラム

神戸市立医療センター中央市民病院内科専門研修プログラムは、当院ホームページをご参照ください。

URL : http://chuo.kcho.jp/recruit/late_resident

見学等問い合わせ先

猪 熊 哲 朗 : inokuma@kcho.jp